

長期寄宿体験における不安が児童の生きる力に及ぼす影響

The Influence of anxiety for Long-term Boarding Experience upon Children's IKIRU-CHIKARA(Zest for Living)

○瀧直也（信州大学） 平野吉直（信州大学） 本村明夏（国立日高青少年自然の家）

キーワード：不安、生きる力、長期、寄宿体験

1. 緒言

長期の宿泊体験や自然体験活動の教育的効果については、これまで多くの研究がなされ、生きる力の向上などの成果が報告されている。また、自然体験活動と不安に関する研究も多く報告されている。堀川・柴山（2014）は、小学5年生の自尊感情と不安の相関について明らかにしている。

そこで本研究では、70日間の長期寄宿体験における不安が、児童の生きる力に及ぼす影響について明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

（1）蓼科保養学園の概要

蓼科保養学園は、長野県諏訪市の児童福祉施設で、子どもの心と体の健康づくり、精神面での自立の促進、蓼科の恵まれた自然とのふれあいの推進を目的に運営されている。児童は、併設された学校で学習指導要領に基づく教育を受けながら、家族を離れ同学年の仲間と集団生活を送っている。

入園期間は、70日間で、1年間を4期（1期：4月～6月、2期：7月～9月、3期：10月～12月、4期：1月～3月）に分けて実施している。各期の定員は40名であり、入園対象となる児童は、諏訪市内の小学校に在籍する小学5年生の児童である。

児童は期間中、ホームと呼ばれる部屋で4～5名で共同生活を送り、運動習慣や生活習慣等、学園のルールに沿った生活を送っている。また、豊かな自然環境の中で、様々な体験プログラムや行事を行っている。

期間中、保護者に会うことができるのは中

間日に設定されている面会日のみで、手紙でのみ連絡をとることができる。

（2）調査対象者及び調査時期

調査対象者は、平成X年の第Y期入園児童37名（男子21名、女子16名）である。調査は、Pre（入園日直後）、Mid（中間日前後）、Post1（退園日直前）に学園内で実施し、Post2（退園2か月後）は郵送にて調査を実施した。

（3）不安の調査

70日間親元を離れ、学園で生活することに対する児童の不安を測定するため、独自にアンケートを作成した。アンケートは、「親とはなれてくらすこと」や「友達と仲良くできるか」等の5項目と、逆転項目「学園生活が楽しみ」の計6項目から成っている。各項目は、「とても心配（楽しみ）である（6点）」から「全く心配（楽しみ）でない（1点）」の6段階で回答を求め、合計点を不安得点とした。調査は、PreとMid時に実施した。

（4）IKR 評定用紙

児童の生きる力を測定するため、橘らが開発した「子ども IKR 評定用紙」を用いて調査を行った。この評定用紙は、生きる力を構成する14の下位指標についてそれぞれ5項目（そのうち一つは逆転項目）、計70項目から成る。各項目は、「とてもよくあてはまる（6点）」から「まったくあてはまらない（1点）」の6段階で回答を求め、合計点を IKR 得点とした。調査は Pre、Mid、Post1、Post2 時に実施した。

（5）統計処理

不安得点の変化について、t 検定を用いて

分析した。また、不安得点の平均点を元に、不安低得点群と不安高得点群に群分けし、不安得点と調査時期を要因とする IKR 得点を二要因分散分析を用いて処理し、入園時における児童の学園生活に対する不安と生きる力の変容の関係を分析した。

3. 結果及び考察

(1) 不安の変容

不安得点の変化をみるため、t 検定を用いて分析した結果、入園児童の不安は、Pre と Midにおいて有意に減少 ($t=2.70, p<.05$) し、入園当初に比べて学園生活中盤に低下したことが明らかになった。

表 1 不安得点

調査時期	N	平均値	SD	t 値
Pre	37	16.32	6.34	2.70*
Mid	37	13.59	5.64	

* $p<.05$

(2) 不安高得点群と不安低得点群の生きる力の変容

Pre 時の不安得点平均点 (16.32 点) から上下 1 点を除く、14 点以下の 15 名を不安低得点群、18 点以上の 16 名を不安高得点群とし、群と調査時期を要因とする二要因分散分析を行った (表 2、図 1)。

その結果、交互作用が有意であり、不安高得点群と低得点群の IKR 得点の変化に有意差があることが認められた。さらに詳しく分析するため、単純主効果検定を行った結果、Pre において、不安低得点群の IKR 得点は、不安高得点群よりも有意に高いことがわかった (1%水準)。Mid において、不安低得点群の IKR 得点は、不安高得点群よりも高い傾向がみられた (10%水準)。Post1 において、群間の IKR 得点の差は見られなくなった。

表 2 不安高低群ごとの二要因分散分析の結果

	N	Pre		Mid		Post1		Post2		F 値		
		平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	群間	時期	交互
低得点群	15	304.33	29.75	312.20	36.65	307.73	36.51	300.87	41.11	1.90	6.18***	5.54**
高得点群	16	267.62	30.04	289.00	36.20	307.12	43.45	296.97	38.53			

** $p<.01$ 、*** $p<.001$

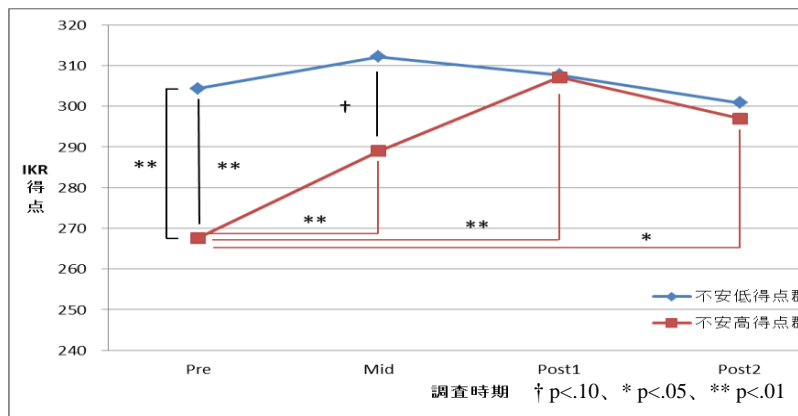


図 1 群ごとの IKR 得点の変化

不安高得点群の IKR 得点は学園生活が進む中で有意に向上した (1%水準)。

入園当初、学園生活に対する不安が高い児童は、不安が低い児童に比べ、生きる力が低いことが明らかになった。学園における様々な活動や経験を経て、不安が高い児童の生きる力は向上し、入園時に見られた不安が低い児童との生きる力の差は認められなくなった。また、不安が高い児童の生きる力は、退園 2 ヶ月後まで維持されていた。一方、不安が低い児童は、生きる力の有意な変容はみられなかった。

4. 結論

本研究では、長期寄宿体験における不安が児童の生きる力に及ぼす影響を明らかにするために、不安調査と生きる力の調査を行った結果、以下のことが明らかになった。

- ・長期寄宿体験を通して、入園児童の生きる力は向上した。
- ・児童の学園生活に対する不安は、入園当初に比べて学園生活中盤の方が減少した。
- ・入園当初、学園生活に対する不安が高い児童は、不安が低い児童に比べて生きる力が低かったが、生活を経て生きる力が向上し、両者の生きる力の差は認められなくなった。